

## 概要書

本博士学位請求論文（以下は本論文と略す）は、近世初期の文学における隠逸観を考察したものである。俳諧と漢詩文の二部に分けて、宝井其角と林鶯峰に焦点を当てた。この二人は、それぞれ俳壇と漢詩文壇における「市隠」の成立を告げる先駆的な存在であったということが、本論文の結論である。俳壇と漢詩文壇の間の影響関係も本論文の一つの課題として考えてみた。以下は本論文の概要を紹介する。

「序章」では、まず本論文の基本論調を述べて、隠逸の基本概念を確認した。中国の隠逸と日本の隠逸の違いについても、先行研究の成果を参考にしながら説明した。問題意識と内容展開の部分では、本論文が完成するまでのいきさつを概略し、問題意識がどこにあるのかを紹介した。さらに本論文の内容構成および各章の内容展開を予告した。

第一章「市隠其角―俳諧に於ける市隠の成立」では、潁原退蔵氏の指摘した「市隠芭蕉」への反論と、其角の作品における「市隠」の部分を示した。其角の活躍した時代では、『本朝遯史』や『扶桑隠逸伝』などの出版に象徴される隠逸思想の流行があつて、芭蕉や素堂など隠者を自称する俳人たちが隠逸伝に影響されていることは、已に先行研究の指摘する所である。彼の俳文や序跋などを列举し、其角も蕉門の一員として隠逸伝に関心を持っていたことを確認した。従来の研究では、芭蕉が「市隠」であるというように言われてきた。しかし、芭蕉は市中から離れて生活した人間で、草庵と行脚の人生を歩んだので、「市隠」とは言い難い。むしろ、生涯江戸市中に定住していた其角こそ「市隠」と推定した。其角は、隠逸伝に寄せる関心のほか、多くの中国と日本の古典文学を受容し、その知識を巧みに引用していることが明らかになった。多くの発句（前書を含む）、連句、俳文などの作品において、「市隠」其角の像を刻み込んだことを指摘した。近年の研究は、其角を蕉風を牽引する特別な存在として重要視するが、全円的な其角像を得るためには、こうした其角の再評価は通らなければならない道である。本章も、其角再評価の一環として位置づけることができる。

第二章「其角における乞食の意義」では、其角の作品における「乞食」について考察した。芭蕉が「乞食の翁」と自称し、自ら身を乞食僧にやつして漂泊の旅を続けていたことは、これまでの研究で指摘されてきたところである。しかし、其角の作品における「乞食」に注目するものはほとんどなく、芭蕉の乞食を論ずる先行研究の中で、其角の詠んだ句を、その例として挙げていることすらある。芭蕉を中心とした俳諧研究では、其角たちの貢献

をすべて蕉門というレッテルで括られて、一個人としての存在が無視されることが多々ある。本章では、其角の「乞食画卷」という絵の作品にある賛の部分を中心に、其角の描き上げた「乞食像」を考察した。芭蕉の「乞食」との比較を試みながら、二人の「乞食」の異同を指摘し、「隠逸」における芭蕉と其角との違いは、二人の描く「乞食」像においては、どう反映されているか、という問題も論証してみた。本章の考察によって、第三章で考察する白楽天との関係や第四章で取り上げる法華経との関係を発見できた。

第三章「其角と白楽天―『虚栗』を中心に」では、其角の俳諧と漢詩との関わりを論ずるものである。特に、其角の処女作『虚栗』において、其角の句にある白楽天の影響はどのようなものだったのかということについて考察した。第二章で、其角の「乞食」句の前書においては、すでに白楽天の詩句が掲げられることを確認したが、本章の『虚栗』では、句の前書で「和古詩」や「効白氏之隣女」あるいは直接白楽天の詩句を掲げていても、かならずその掲げた詩句に拘ることなく、関連する白楽天の漢詩を何首か織りまぜて新しく換骨奪胎していることがわかった。前書では白楽天に触れていない句においても、白楽天の詩を自由に駆使していたことが明らかになった。神田秀夫氏は、其角の学問力に対しては低評価だったが、この章では、細かく其角の句にある白楽天の漢詩の転用を分析して解釈してみても、其角の学問力を再評価した。

第四章「其角と法華経」では、日蓮宗の徒としての其角が、いかに『法華経』を意識し利用していたかを考察した。其角が日蓮宗の徒だったことは、すでに江戸時代に指摘されたことだが、近代以降はほとんどそのことは顧みられなくなっている。其角の宗教信仰が日蓮宗だったということの最も大きな意義は、『法華経』との関係を確認することである。それは、貞門談林俳諧に行われてきた釈教俳諧の延長線として考えてもよいものであり、これまでの先行研究の中では、蕉門の釈教俳諧に注目するものが少なく、本格的に其角にある仏教関係の句を取り上げる研究は見られない。本章では、其角の作品に出てくる多くの『法華経』の文句を示し、仏教研究者の富永半次郎の其角論を借用して、其角と『法華経』との関係を指摘した。仏教関係の知識がほとんどない筆者は、問題提起としてののみ法華経との関係に立ち入ったが、其角と法華経との関係においては、「序説」のような位置づけとして本章を作成したということをお断りしておく。さらに其角の「市隠」の精神も、其角の描いた「乞食」像も、『法華経』という大きな存在を根底にしたものだったことの意味も提示した。

第五章「芭蕉隠逸の虚実」では、本論文の出発点に戻って、芭蕉の隠逸の是非を考察した。第一章「市隠其角―俳諧に於ける市隠の成立―」で其角の市隠を提示するために、芭

芭蕉の市隠ではない一面を引き合いに出したが、芭蕉の隠逸を深く検討せずに終わった。本章では、芭蕉の多くの俳文に書かれる隠逸志向に関する内容を分析し、芭蕉の山林への隠逸志向を明らかにした。また、芭蕉は「市隠」ではなかったが、「市隠」の語り手としての意義を認めるべきであることも主張した。芭蕉の隠逸は中世的隠逸観に近く、市中より山林へ、あるいは自然への志向があった。それは其角と好対照で、近世初期の文学の中で、隠逸思想におけるこの師弟の違いは、川平敏文氏の指摘した中世的隠逸観と近世的隠逸観の併存を象徴するような二人であったと言ってよい。

第六章「芭蕉の李白受容―『詩人玉屑』の影響―」では、「田舎の句合」の嵐雪の序文を取り上げ、その中に挙げられた中国の詩人蘇軾、杜甫、黃庭堅などの人名に注目した。この序文について、塚越義幸氏は『詩人玉屑』との関連から論じたが、『詩人玉屑』には、李白の名前がほかの三人と並称されることがあるのに、なぜ「田舎の句合」においては、李白の名前が挙げられていないのかについて言及していない。本章では、芭蕉の俳文や書簡などにおける人名のあるものを列挙し、芭蕉の中の李白の受容を考察した。筆者の調査では、芭蕉は貞享二年山岸半残宛書簡の前の『虚栗』跋（天和三）の段階では、まだ「李杜」を併記しているが、貞享三年の「四山の瓢」以降は、「李白」の名前はもう出てこない。この貞享二年が、芭蕉における李白受容の分水嶺と筆者は考える。その李白の名前が芭蕉の作品に出てこなくなった理由として、塚越氏と違う角度から、『詩人玉屑』の存在を挙げた。

第七章「芭蕉の白樂天理解―「樂天が腸を洗ひ」考―」では、元禄五年二月十八日付曲水宛の芭蕉書簡にある、「樂天が腸を洗ひ」という表現を考察した。先行研究においては、この表現に対する解釈にはさまざまあるが、いずれもこの表現の典拠を示しておらず、仁枝忠氏も出典の提示はあるが、何の説明もしていない。筆者は仁枝忠氏の示した出典を解説し、分析を試みた。さらに新しい出典の指摘を提示し、「樂天が腸を洗ひ」という表現の意味を解釈してみた。芭蕉の作品において、特に俳文などにおいては人間の肉体の一部分を並べて何かを表現するという方法を示した。本章および第三章の考察によって、芭蕉や其角ら俳人の間では白樂天の漢詩がいかに意識され愛読されていたかを証明した。

第八章「吏隠鷺峰―漢詩文における吏隠の成立―」では、鷺峰の漢詩文を讀解し、弟林読耕齋の隠逸観と比較した上で、鷺峰の隠逸観を考察した。林家二代目の当主としての林鷺峰は、弘文学院学士という称号を与えられて、儒者としての最高の地位を与えられた人物である。彼の周辺には、『古今逸士伝』を（万治四年）著した林家と親交を持った幕府の儒医野間三がいて、『本朝遯史』を著した弟林読耕齋がいる。こうした環境の中において、

鶯峰も隠逸への関心が高く、自分なりの隠逸の方法を模索していた。それは「吏隠」の隠逸観であった。鶯峰は隠逸というのは環境によるものではなく、心の持ち方によるものだと主張する。鶯峰の「吏隠」には、白居易の影響も無視できないものがあることが明らかになった。

第九章「林鶯峰と司馬温公の『独樂園記』」では、鶯峰における司馬温公の影響、特に司馬温公の「独樂園記」（『古文真宝後集』など）という、当時俳人の間でもよく知られる名文の影響を考察した。鶯峰の人生最大の仕事は『本朝通鑑』の編纂であり、その『本朝通鑑』の編纂は、中国北宋の『資治通鑑』に倣ったものであることは周知のことである。『資治通鑑』の著者は司馬温公で、歴史書の編纂において司馬温公から多大な影響を受けたことは容易に想像されるが、隠逸観においても、司馬温公とその「独樂園記」の影響が大きかった。しかし鶯峰は、司馬温公の「独楽」の精神だけを継承するのではなく、孟子の「衆楽」観念の影響や、儒家の「独善・兼濟」などの考え方を併せて、自分なりの「吏隠」観を作り上げた。司馬温公を詩文に詠む場合、邵康節の名前もよく一緒に出てくる。従って、鶯峰の中では、司馬温公と邵康節は一对の人物として考えていたといえることができる。

第十章「林鶯峰と邵康節」では、鶯峰における邵康節の影響を考察した。邵康節は司馬温公と同時代の人で、隠逸の詩人であり、易学の大家である。鶯峰は司馬温公と邵康節との交遊に憧れて、自分と親友加藤明友との交遊を司馬温公と邵康節のそれに擬えることをよくした。そしてそのことは、鶯峰の詩文によって明らかになった。邵康節の詩集『擊壤集』は、鶯峰の愛読した書物で、その中の詩は鶯峰が詩作するときの見本でもあった。鶯峰は邵康節の最も特徴的な「く吟」という詩体倣って、多くの「く吟」詩を作った。これらの詩の中からも彼の吏隠の精神が見出され、邵康節の影響、白居易の影響を確認できた。さらに読書への隠逸や、別荘訪問の隠逸などさまざまな隠逸の形が鶯峰にあったことも提示した。司馬温公や白居易などの詩人と違って、邵康節は生涯仕官せず詩人と学者を貫いた人物で、この人物から多大な影響を受けたことは、大きな意味があると指摘した。「終章」では、其角と林家を結びつける可能性を考えてみた。大庭卓也氏などの研究によつて、其角門下で俳諧に遊んだ林家の儒者の存在が明らかになった。それを踏まえた上で、其角の作品によつて、其角と林家の学問、及び其角がいかに鶯峰を意識していたかを考察した。また、鶯峰と読耕斎の二人の隠逸観の違いは二人の身分や性格にもよるものと説明した。さらに本論文の反省点と今後の課題をまとめた。